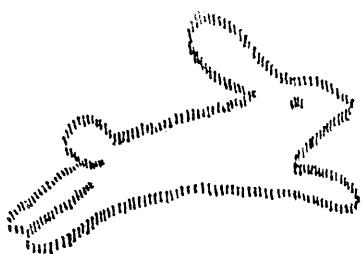


痛いの痛いのとんでいけ（その二）

——虹を見て下さい——

江寿木蕪



六月二十八日

九時四十分登園、矢の如く走って来る。「切手は?」と聞く。「ネペールに送っちゃったの」と答えると他の組に走っていった。どこにも無いとわかると、七夕の入場券用の紙を見つけ、パッと投げつける。「これはお友達のなの、K夫ちゃんの好きな色はどれ?」と聞くと、紺色を取った。又バラバラにするのではないかと思つて上の棚に置く。違う色が欲しそうなので抱っこして見せると、怒つてか持っていた鉛筆で胸をさす。「痛い!」と悲鳴をあげるとニヤニヤして、「黄色が欲しい」と言う。取つてあげると喜んで下りた。会の始る時間も10時からと書き、一回から十回、百回使える券をつくる。友達がつくつている七夕飾りを二つ貰ったのにいくつでも欲しいので、「外へ行かない」と誘つてぶらんこのところへ行く。空いていなかつたので待つていると、「待つのはいや、どうして待つの?」と言う。「友達が三百人いてぶらんこが四つしかないでしょ」と言うと、「どうして四つしかないの?」と言う。「ぶらんこが沢山あつた

ら、走って遊べないでしょ」と話しているうちにゆたかちゃんが降りて乗せてくれた。お尻がすぐ落ちてしまつが繰り返えし乗つた。滑り台も下から上へあがつて、「先生、次だよ」と言う。上迄いくと、「成功」という。自分は真中位までしかできない。でも「成功?」と聞くので、「成功よ」と言うと遊びが続いた。

アカシヤの新しい芽がでてきたのを友達が取つたり、葉っぱで笛を鳴らしたりして、いたのを見て、「生きているのにどうして取るの?」「どうしてとげがあるの?」「どうして音が鳴るの?」と質問がとまらなくなる。「どうしてかしら?」と首をかしげると満足いかずに泣きそよな顔になる。気をまぎらわしたいと思つて組立てられたブルーの方に誘うと、「ぼく、ブル好きだよ」と言つうが、すぐ走つて事務室に行き引出しをあけてバッヂの分類をしだす。「お弁当食べる? 冷蔵庫で冷たくなつてないわよ」と言うと、「これかたづけてから」と言つて、こんどは椅子を持ってきて状差しから郵便物を取るうとする。「大切なものだから黙つて取つてはいけない

のよ」と言うと、「取つていいですか?」と返事が返つてきた。今迄だと止めるのもきかず投げつけていたのに嬉しかつた。一人で冷蔵庫からお弁当を出して、ヤクルトと焼いたパンをたべた。お母さんに抱っこして帰る。

六月二十九日

お母さんが「歯医者へ行くで早く迎えに来られないかもれない」と言って帰る。先ず、「切手は?」と各部屋を廻る。しつつこく言うことは殆んどなくなった。七夕の入場券を友達がクレヨンで書いていると、「消えないものをかしてくれた」と言い、黄色い紙にマジックで線を引き曜日を書いていると、Sがきてはじっこを切つて持つて行つてしまつた。「どうして持つて行くの? 立てない。歩けない」と大騒ぎになつた。しばらく抱っこしてSを怒つたり、線を引きなおしてあげた。同じようにも怒つても、ぐるぐるとからまつてほぐれなくなつてしまつた。『もうすぐここから逃がれられるだろう』という思いが、抱っこの肌を通していくらかで

も感じられるようになつた。

室内のトランポリンにのつては友達を押しのけるので、「痛いからやめて」と言うとやめとやめて又押すので、手を持つてゐるうちに跳べるようになつてきつた。年少組のAがBにぶつかつてBが落ちたとたんCにぶつかり泣いていたら、「こいつが犯人だよ」とAを指さした。よく友達が見えるようになつた。だんだん混んでくると、「順番だよ」と自分から言つて年少組の女の子と女の子の間に入つていい姿勢で待つ。先生の手につかまつて順番を待つては四回とんだ。それから傍のオルガンを見て、ふたを開けてならしたが鳴らないで踏んであげると自分で小さい椅子を持つてくる。足を踏み、同時に指を使うことは難しく一緒にやると楽しそうにしばらぐ鳴らしていた。一人では鳴らない『足踏みオルガン』はK夫にとつてもかかわりができるいい。女の子がいつも弾いているのをトランポリンをしながら見ていたのだろう。『物』しか見えなかつたのに友達の様子を見る余裕がでてきたのか。

年少組で床上積木で街をつくつていた。部屋に帰る時、走つていて先生にぶつかつた。「ごめんなさいね」と言って頬っぺたの涙を拭くとすぐ泣きやんだ。抱っこをしてもだらつとぶるさがるだけだつたが、ぴたりと体をつけることができるようになった。お弁当はところ天とポッキーを食べた。「牛乳飲む?」ときくと返事がなかつた。お弁当箱はそのままで、「棒が欲しい」と言った。「先生と一緒にかたづけましょうよ」と言うと、「できない」「疲れちゃう」と言う。一つだけでもやらせようとした。袋のチャックを半分までやつた。今迄は、「やらせよう」などとは全く思わなかつた。K夫が喜ぶことだけをしてあげたいと考えてゐた。しかし、私の中のK夫が育つてきつたのか、「きょうはかたづけられる」とぶつとこの瞬間に感じたのだろう。切手への寄りどころから少しずつ離れて他のことにも視野が広がつていくような気がする。切手を持つていても忘れる時がある。市が尾の先生なら誰でも安心していられるという気持がK夫自身に感じられる。

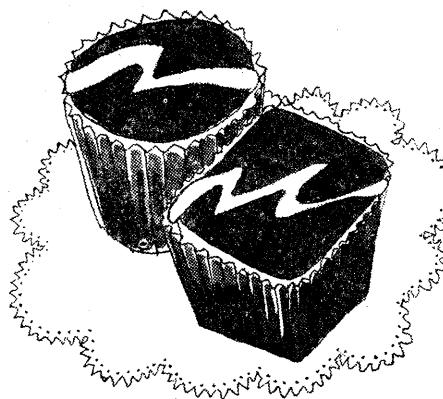
六月三十日

九時二十五分登園。はじめて切手のことを言わずにトランポリンに走っていく。帽子をかぶつたままいい表情ではねている。鞄の鈴が鳴る。オルガンを弾くと、「合わせているんだよ」と言う。友達がのると押して降ろしてしまったが、自分が気がすむと友達に、「乗れ」と言う。オルガンをとめると、「弾いて」と言う。曲に合わせて友達とかわるがわる「フーフー」と息をはずませる程、五十分近く乗った。本を持ってきてトランポリンの上にのせてとぶので、「本がいたむからよしましょう」と言うと、「どうしてー」と一度聞き返えしただけですぐ納得して本棚に片づけても奇声は全くださなかつた。通りかかる先生をつかまえては、「オルガン弾いて」と誘つて弾いてもらうなど、どの先生でもかかわりを持つようになつた。友達が、「蛙の歌」を弾くと「蛙の合唱だね」と言つて一緒に歌つた。お母さんが迎えにきたが、桶から流れてくる雨水を友達と苺パックで掬つて遊びはじめたところだった。お母さんが、「どうしたらい

いですか?」と言うので、「柳になつたつもりで傘さしてあげて下さいな」と言つた。二十分位遊んでおんぶして帰つた。

七月三日

七夕祭りの短冊をひっぱつて取る。「おうちで飾るんだ」と言う。「K夫ちゃんの欲しいのをつくりましょう」と言うと、「待てない、どうして待つの?」とはじまつ



たが寝てさわがず、「錠がさびしくなるでしょう」と言うとつけに行つた。「短冊、三十枚書いて」と言つた。

七夕祭の会が始るのでホールに集りだと部屋で書架を三つつかって囲にしてその中に入つて本を分類していだ。「くださいな」と買いに行くと、「まだですよ」と言う。しばらくして、「ある・かにをくださいな」と言うと、「ある・かには三冊ありますがどれですか?」と言うので、「一番端のを下さいな」と言うと渡してくれた。掌をポンとたたくとお金がなくとも満足している。

錠から短冊を取つたときも、「きつとつけにいくだらう」と心のどこかで思つていると本当につけにいく。これはどういうことなのか、もつと早くこっちからそう思えはよかつたのか——。お互いがそう思える時期がきたのだろうか。

グローブジャングルに友達がいたら乗れないがまわしていた。はじめてである。

七月四日

鞄と帽子を入口に放つて抱っこする。いつものトランボリンのところにいくとなかったのでマットに寝てしまふ。急いでだすと喜んで乗る。「外の七夕飾りがどうしてないの?」と気がついて聞く。「雨が降りそうだから」と答える。ホールの七夕飾りを見つけて、又「つくって」と言う。「待てない」が始るので外のベンチで抱っこして紙風船を折る。「人間以外の動物は待たなくていいの?」と聞く。「蛇や蛙は待たなくていいのよ」と言うと、「蛙は土の中で待つているよ」と言う。会話があつた。気分転換させようと思つて靴を履かせて兎を見た。「兎ってどれ?」と聞く。こんな身近な兎も見えなかつたのか——。「兎さんに草をあげる?」と聞くとだまって興味を示さなかつた。土をいじつていつもの地図を書き、その上に輪つなぎと紙風船を走らせた。たかまさちやんが取りあげてしまつたが、返すとすぐに泣きやんだ。紙芝居が始まると絵は面白くない。字が見たい。と言つて裏にまわつたり不安そうに落ちつかなくなつた。きょうはお弁当が食べられた。

七月五日

誕生会で年長組はホールに行つたが、トランボリンに乗つてオルガンに合わせて跳んでいた。自分が疲れると友達をのせて、「オルガン弾いてあげてね」と言つてマットに寝そべつていた。かわりばんここに遊ぶということが楽しくなつてきたようだ。部屋から、「虹の橋がかかることき」の本を持ってきて「読んで」と言う。ゆっくりと読むと体をつけてよりかかつて聞いていた。読み終ると、「にじってなあに？」と聞く。「雨が降つて急にお日様が出るところなんふうにきれいにお空に出るのよ」と説明する。「K夫ちゃん、見たことないの？」と言うと、

「うん」と言う。「じゃあ、お星さまにお願いしましょう。虹を見せて下下さい。」と言つて両手を合わせてお願いすると、一緒に本を見ていた友達も手を合わせて併んだ。K夫が「七夕さまに書いたらいいよ」と言つたので、「それがいいわ、」と言つて折紙を渡すと、「にじをみせてください」と書いた。自分でつくった七夕の記念切手、七夕の記念のお金、入場券との願いごとの紙を封筒に

入れて大切に持つっていた。冷蔵庫からお弁当を持ってきて食べているとお母さんが迎えにきた。少しのしらす干と、少しのペイナップルが混つてしまつていてが何も言わないで食べた。お母さんが、「家にいたらこんなになつていると怒つて食べないので——」と言つていた。役員の知らないお母様方にも抱っこしたりしてお母さんも喜んでいた。

(神奈川・市が尾幼稚園)